

内閣府消費者委員会

こどものケガを減らすことを目的とした 「コミュニケーションの場づくり」の試み



NPO法人 Safe Kids Japan
太田 由紀枝

本日のお話



- ① 救急搬送データで見る「**こどものケガ**」
- ② 「**こどものケガ**」を減らすための考え方
- ③ 「**こどものケガ**」を減らすために・・・**Safe Kids Japan**の活動
- ④ **コミュニケーションの場をつくる**・・・プラットフォーム＆SNS活用の試み

はじめに・・・Safe Kids Japanとは



OECD加盟国共通の課題 「予防できる事故による子どもの傷害や死亡」
アメリカでも予防できる傷害は「[the #1 killer of kids in the United States](#)」

1988年：アメリカで「事故による子どもの傷害を予防するための非営利団体」が
設立され、チャイルドシートの普及活動を開始

2005年：Safe Kids Worldwideという国際組織として再編

2021年：アメリカ国内に400支部、世界30カ国の加盟国を持つ団体に発展

2014年：日本にSafe Kids Japanを設立



子どもの死亡事故の現状

子どもの不慮の事故の発生傾向 ～厚生労働省「人口動態調査」より～
 出典：令和4年3月23日 消費者庁消費者安全課

令和2年の死因順位

	第 1 位	第 2 位	第 3 位	第 4 位	第 5 位
0歳	先天奇形, 変形及び染色体異常	周産期に特異的な呼吸障害等	乳幼児突然死症候群	胎児及び新生児の出血性障害等	不慮の事故
1～4歳	先天奇形, 変形及び染色体異常	悪性新生物	不慮の事故	心疾患	インフルエンザ
5～9歳	悪性新生物	不慮の事故	先天奇形, 変形及び染色体異常	心疾患	インフルエンザ
10～14歳	自殺	悪性新生物	不慮の事故	心疾患	先天奇形, 変形及び染色体異常

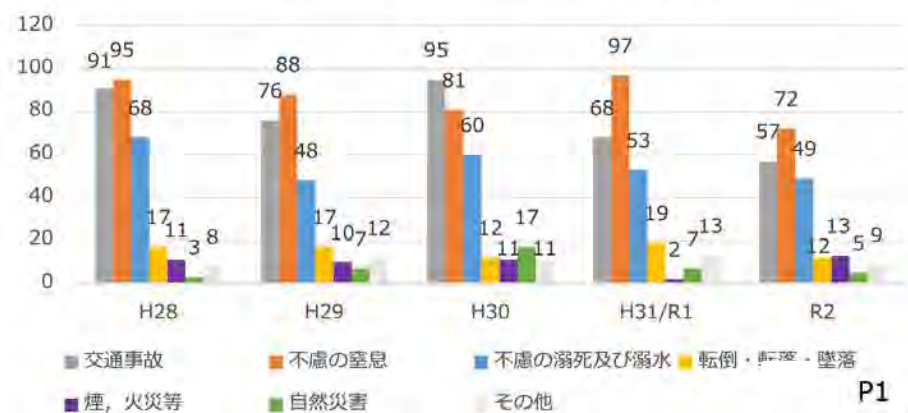
※左図：人口動態調査 上巻 5-17 死因順位別にみた性・年齢（5歳階級）別死亡数・死亡率（人口10万対）及び割合 から

※下図：人口動態調査 下巻 死亡 第1表-1 死亡数, 死因（三桁基本分類）・性・年齢（5歳階級）別（ICD-10コードV～Y, U） から

子ども（0～14歳）の不慮の事故等死者数



子どもの不慮の事故の死因別死亡者数



① 救急搬送データで見る「こどものケガ」 (0歳～5歳)



0歳から5歳までの乳幼児の事故で、平成29年から令和3年までの5年間に46,124人が救急搬送されています。令和3年は8,936人が救急搬送されています(図3-2)。

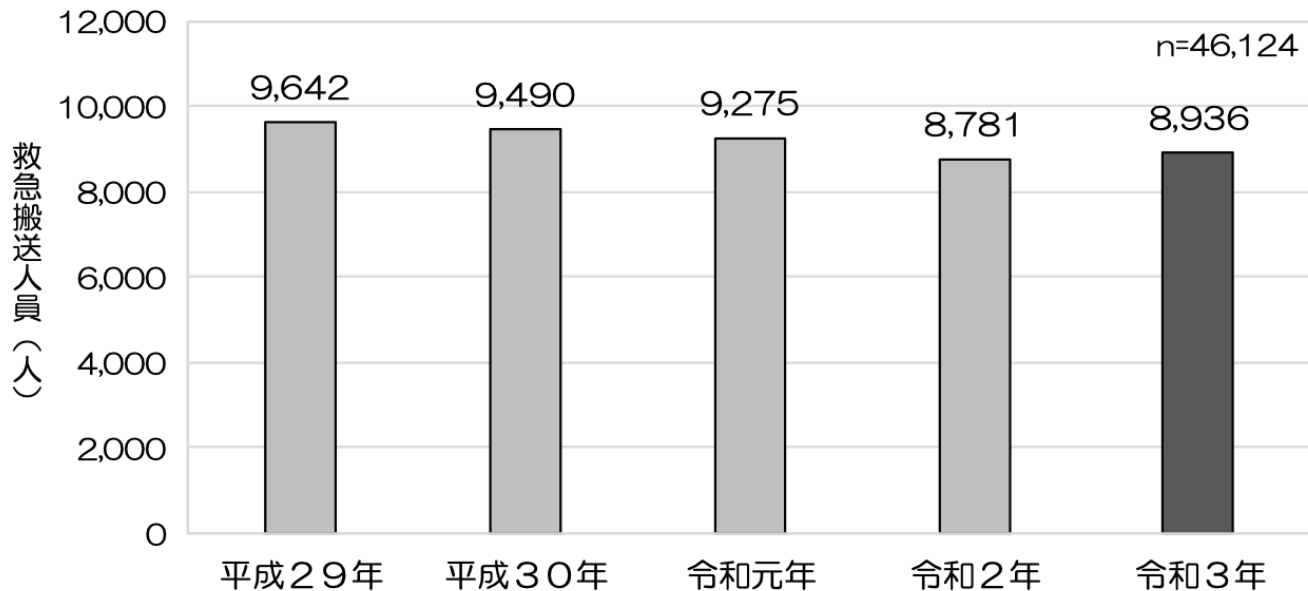
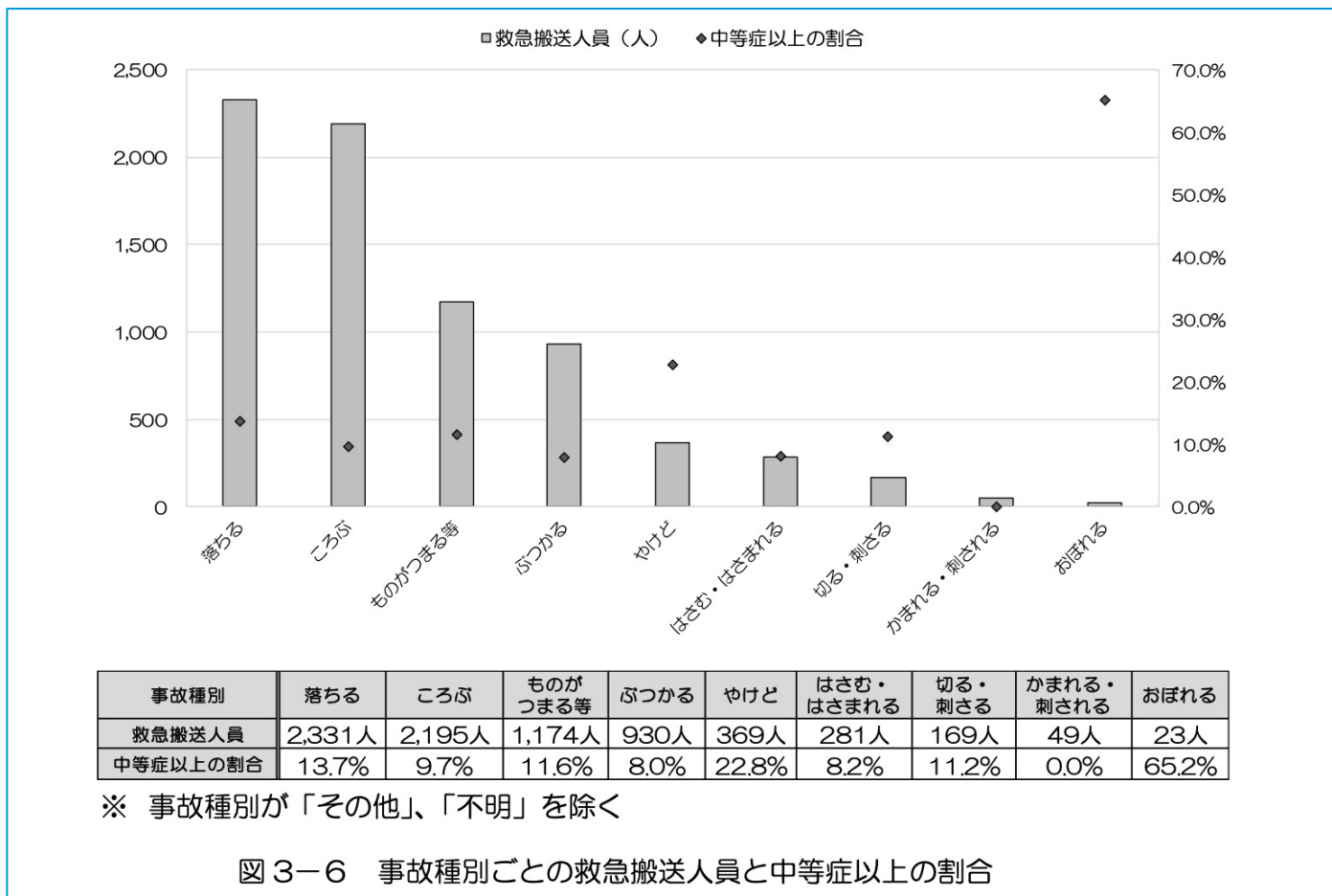


図3-2 年別の救急搬送人員

① 救急搬送データで見る「こどものケガ」 (0歳～5歳)



① 救急搬送データで見る「こどものケガ」 ～「落ちる」の数～

	0歳	1歳	2歳
2019年	542	640	557
2020年	412	543	482
2021年	487	542	480

(人)

②「こどものケガ」を減らすための考え方 「ABC理論」



- 重症事故の数
- 事故死の数



変えられるもの (C) を見つけて、変えたいもの (A) を変える



- こどもの年齢
- 発達段階
- 季節
- 時間
- 天候



- 安全な製品の設計 (メーカー)
- 安全な製品を使う (保護者・保育者)
- 安全な環境を整備する (保護者・保育者)

②「こどものケガ」を減らすための考え方 「3つのE」



Environment 環境・製品

- 蒸気の出ない炊飯器
- お湯がこぼれない電気ケトル
- 送迎バスの安全装置

Enforcement 法律・基準

- チャイルドシート
- 自転車用ヘルメット
- 安全装置装備の義務化

Education 教育・啓発

- 消費者向け教育
- こども向け教育
- 教職員向け研修
- 保護者向け研修

③ こどものケガを減らすために Safe Kids Japanの活動

SAFE
KIDS
WORLDWIDE
JAPAN

「つかめない」「登れない」「落ちない」 ベランダの柵を 考えるプロジェクト

ベランダ等高所からの子どもの転落を予防する
—研究者、事業者、保護者と共に目指す安全な町、安全な建物—



ベランダからの子どもの転落は、
保護者の皆さんの意識や行動だけで予防することは困難です。

子どもがベランダ等の高所から転落し、重大な傷害を負うケースが相次いでいます。東京都の報告によると、2007年4月から2017年3月の間に、ベランダからの転落により救急搬送された、または受診した12歳以下の事例は145件で、そのうち入院を要する事例は全体の7割以上あり、死亡に至った事例も2件ありました。

今までベランダからの転落の予防策は、「見守り」や「目を離さないようにする」といった保護者の意識・行動に依存したものが主なものでしたが、その予防効果は低く、転落事故が多発しています。また、ベランダの構造や柵のデザインが多様化・複雑化してきていることなどから、この事業では環境改善による予防策を検討することにしました。

子どもが柵を乗り越えにくくする実験①

実験

- 高さ120cm～140cmに設定された実験機を乗り越えられるか実験を行いました。
- ひとつの条件につき、乗り越えられるかどうかの制限時間は30秒としました。
- 子ども達は裸足で実験を行いました。

高さを変えた実験



実験①で使用した実験機

制限時間は30秒



京都市長岡京市 さくらんぼ保育園での実験

裸足で実験



神奈川県横浜市 緑園なは保育園での実験

3歳児クラス、4歳児クラスの条件

3歳児クラス、4歳児クラスの子どもは120cmから始め、その条件を乗り越えられた子どもは、さらに高い条件で乗り越えられるかどうかを確認しました。

5歳児クラスの条件

5歳児クラスでは、一番高い140cmの設定から開始し、140cmを乗り越えられなかった子どもには、より低い条件で乗り越えられるかどうかを確認しました。

結果

クラス別に柵の高さの設定を変えて乗り越えられた実験数値をグラフにまとめました。



3歳児クラス、4歳児クラスの結果

3歳児クラス、4歳児クラスの子どもでは、柵の高さを高くして登りにくくする対策の効果がある程度確認されました。

5歳児クラスの結果

5歳児クラスの場合には、柵の高さを140cmにしても、京都市長岡京市 さくらんぼ保育園では乗り越えにくくする効果はほぼ見られないことがわかりました。

クラスごとの実験参加人数: 3歳児クラス 35名 4歳児クラス 40名 5歳児クラス 41名

ベランダの柵を考えるプロジェクト

実験 1 柵の高さを上げる



実験結果

各条件を乗り越えられた割合

クラス	参加者数
3	35
4	40
5	41

年齢 \ 高さ	120cm	130cm	140cm
3	65.7%	20.0%	0.0%
4	72.5%	50.0%	27.5%
5	90.2%	82.9%	73.2%

- 手がかりをなくし、高さを上げることは3, 4歳児まではある程度の効果が見られた
- 140cmまで高くしても、5歳児にはほぼ効果が見られない

ベランダの柵を考えるプロジェクト 実験 1 くるくる回る柵を作る



実験結果

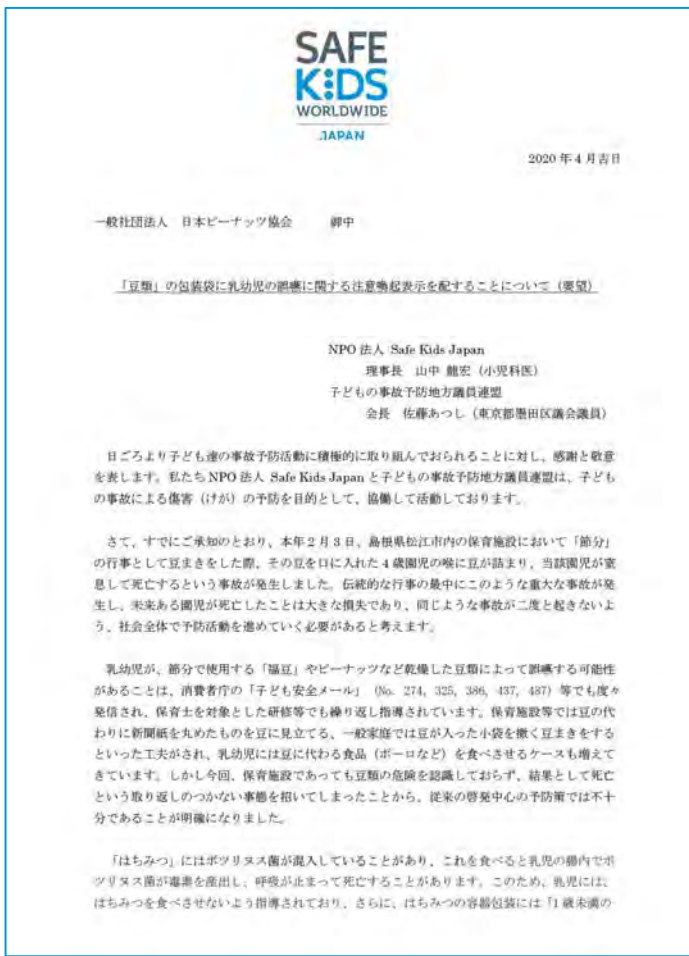


クラス	参加者数
3歳児	23
4歳児	25
5歳児	25

	条件① 高さ130cm 手前に0cm	条件② 高さ110cm 手前に10cm	条件③ 高さ110cm 手前に20cm	条件④ 高さ120cm 手前に20cm
3歳	0.0%	0.0%	-	-
4歳	4.0%	-	28.0%	20.0%
5歳	64.0%	-	28.0%	36.0%

- 条件①：4歳児までは効果が見られたものの、5歳児では半数以上が乗り越えた。
- 条件②③④：乗り越えられる割合は低く、一定の効果が見られた。

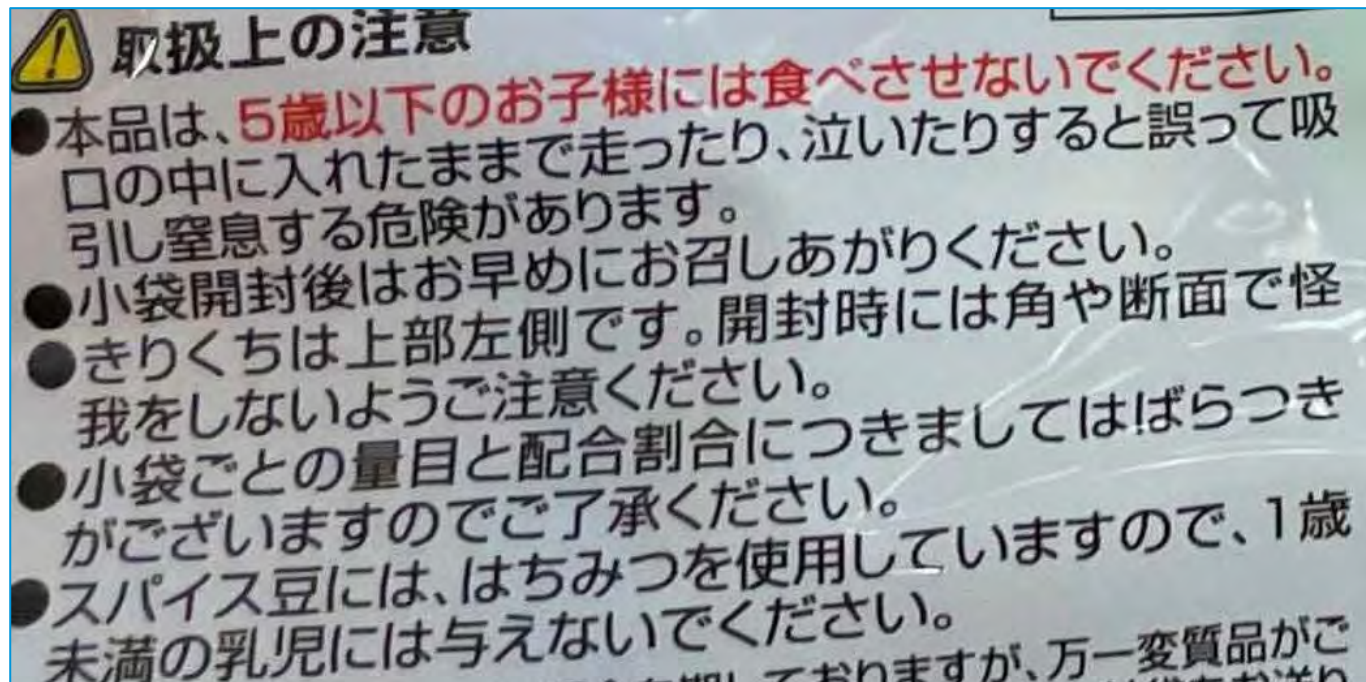
③ こどものケガを減らすために Safe Kids Japanの活動



2020年4月

Safe Kids Japanと子どもの事故
予防地方議員連盟から、日本ピー
ナッツ協会宛に要望書を送付。

パッケージ表記の変更



2021年1月に消費者庁から「5歳以下の子どもには食べさせないで」というメッセージが出されたので、会社としてすぐに対応。対象となる商品には、「**5歳以下のお子様には食べさせないでください。**口の中に入れてたままで走ったり、泣いたりすると誤って吸引し窒息する危険があります。」と表記を修正した。